

管つながら生き続ける

保護された認知症男性

危険性を減らすためだ。

持どう人道的見地から対応と人権を守ることで、我々も板挟みになっている」と胸の内を明かす。

同様の路上生活者が連ばれて来たことは過去にもあった。内藤理事長は「家族や後

見人のいない人が精神科病院で生涯を終えることは今後、増える」と予想する。

た。1日2回の胃ろう2時間間おきに床ずれ防止のために

姿勢を変えられているが、たり声を出さない。」「話が聞かしている気がして、ねえ

正君」。語りかけるような笑顔を三上さんに向けた。

三上正。なぜその名付けたのか、もはや知る人も記録もない。

しかし10カ所の病院から本人の記憶がない上、まだ若いので長期入院が予想される「生活保護の入院枠がいっぱいと断られた。

毎月約35万円かかる三上さんの医療費や食事は公費でまかなわれる。坂本医師は「社会保障費の負担が増えること

「正君」で飯よ「ベッドに横たわる男性に看護師が声をかけた。腹部にながれた胃ろうの管へ栄養剤を流す前に、

たなを吸引する細長いチューブを鼻に差し込む。70歳過ぎに見える男性は苦しそうに左目を開き頭をかすかに反らせ

たが、声を発することはない。認知症の人を治療する福井記念病院（神奈川県三浦市）

の系列で同じ精神科の「みくるる病院」（同県秦野市）。男性は2005年暮れ、秦野市内の資材置き場で倒れてい

るのを発見され、搬送先の病院を発見され、搬送先の病

院で認知症と診断され転院し

切の警えられ、腹部から直接

胃に栄養を注入できる胃ろう

ようで、自分の名前さえ思い

出せない。市は「三上正と

いう仮名で、見た目から「1

945（昭和20年1月1日）

という仮の生年月日を与え、

生活保護の手続きをした。

当時はまだゆっくり歩ける状態だった。「父がアルコール依存症で母が苦労した「ホト

5月の看護記録は「食事はほぼ全介助」07年5月には「無表情。無反応」となった。

08年、鼻からの経管栄養に

症状は一気に悪化した。06年

動かしこたがめつきり減り、

いたが、ベッド暮らしで体を

あった。食事も自分でできて

ていきたい」と語ることも

あった。食事も自分でできて

ていきたい」と語ることも

あった。食事も自分でできて

ていきたい」と語ることも

あった。食事も自分でできて

ていきたい」と語ることも

あった。食事も自分でできて

ていきたい」と語ることも

あった。食事も自分でできて



三上正。三上さんと名付けられた男性。静寂に包まれ影

名前を思い出せず「三上正」と名付けられた男性。静寂に包まれ影

ご意見、情報をお寄せください。メール(okuhou@mainichi.co.jp)...

読んで さまよう 閉鎖病棟から